第五巻第四号

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治のみ子　第五巻第四　卯月號　明治四十一年四月十五日發行

イエス出て例の如く橄欖山に行きけるに其の弟子も從へり。其處に至りて彼等に云ひけるは誘惑に入らざるやう祈れ。イエス彼等を離れて石の投げらるゝ程隔りたる所に跪き祈り云ひけるは

『父よ若し聖旨に叶はゞ此の杯を我より離し放へ。されども我が心に非ず聖旨のまゝになし給へ』

使者天より現はれて力を添へぬ。イエス痛く悲み切に祈れり。其の汗は血の滴りの如く地に落ちたり。…………〔路加傳第二十二章三九――四四〕

嗟呼是れイエスが深夜死するばかりの苦しみ惱みを懷きてゲッセマネの御園に祈念を凝らし給ひし光景に非ずや。

『父よもし聖旨に叶はゞ此の杯を我より放ち給へ、されど我が心に非ず唯聖旨の儘になし給へ』何等熱烈の辭、信樂の祈りぞ。吾人にして若し一點恐怖疑惑の雲影あらむか至高の愛、至純の信仰は獲得せらるべうも非ず。『愛の中には恐れなし。全き愛は懼れを除く』…………〔ヨハネ第一書第五章十八節〕

嗟呼吾人は安むじて吾等が心身を天なる神に捧げ唯一意『聖旨に任せ』奉ることに依て始めて眞に意義ある信仰の生涯に入るを得べき也。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

春の祈禱

一記者

思ふに二六時中クリスマスの時節たる十二月を除けば卯月四月こそは宗教上最も惠まれたる尊き月なるべし。

見よ、四月八日は佛教徒が最も喜び禮拜する釋尊の降誕會にして、四月十九日は我等が精進祈念すべき耶蘇キリストの復活祭に非ずや。

眼を上ぐれば死せるが如き天地宇宙の光景は此に再生一新して陽麗審美の春光を稱えむとす。此の間如何て尊き神の攝理のなからでやは。あゝ二千年の昔、殆ど時を同ふし所を接して釋尊生れイエス復活し給ひし東亞の一隅、然も此の卯月四月の好機に於て尊き二大紀念祭あるを思ふて、吾人は心窃に勇躍歡喜の情を禁ずる能はざる也。

悉多太子の始めて佛母摩耶夫人左腋の下より降誕して六歩を前に『天上天下唯我獨尊』の聲を叫び給ふや、天地感動鳥獸喝仰、人畜殆ど釋迦の御前に平伏して讃美謳歌の意を致せりと云ふ。殆ど之と時を同ふし所を接して廣漠たるユダヤの一角人類のメシヤたるイエスキリスト降誕まし〳〵、一度十字架を尊き血潮もて染め給ふや、三日の後甦り給ふて、ペテロに現はれ十二の御弟子に現し給ひ、今も尙ほ活然として生き給へるの事實は吾人の深く感銘し喝仰する所に非ずや。

嗟呼、卯月四月こそは是れ生と死とを兼ねたる最も意味深き月たるなれ、生といひ死といふ、所詮は之一體にして二物に非ず、死は生の薰り、生は死の先驅、あゝ豈むぞ是れを二物別體として濫りに悲喜すべきものならむや。敢て問はむ、讀者諸子は一念深く思を生死問題に馳するの誠意ありや否？

今や天地は一雨毎に新鋭の氣に溢れ美にして力ある

活世界は我等の眼前近く展開せられむとす。枯れし野路の草、落寞粛殺たる樹々の樹頭、流れゆく水吹きくる東風、囁く木の葉舞ひ行く胡蝶、皆等しく神の御恵みを謳歌して、新鮮紅緑の花冠を飾り、新鋭美妙の花粉を薫して人心内部の結氷を解かしめむとす。

あゝ冬枯れの野に閉ぢ籠りし我等が心、朦朧無明の霧深き我等が胸裡も、おのづと煕々たる春光を宿して天帝の恵み給へる駘蕩の風爽かに、雲霧散じ雨箭收まり、目も彩なる千紫萬紅の野路は新なる信仰の芽と共に寂しき我等が胸裡を賑はさんとす。此の刹那、誰か一片切なる心の感謝と祈念との真情なからざらむや。

「あゝ天地萬有を主宰し、我等人類の父として天上いと高き所にまします愛なる神よ、希くば我等の心眼をして常に天上高き希望と愛と信仰との御殿に向はしめ、吾等をして常に心を空ふし心情を清め春日新鋭の活氣を以て固き信念麗はしき信仰の道に進み入らしめ給へ、若葉萌え出る春の野邊樂の音清き谷の小川、あゝ希くは我等の小さき可弱き胸を通して大知大能の御業を成さしめ給へ!!」

春雨霏々點滴の音軒端を叩く、あゝ之ぞ枯れし草木を蘇し新なる清き萠芽を出さしめんず神の尊き御旨なれ。神に溢れんヨりの熱愛あればこそ時に花を散らし花を養ひ給ふなれ。誰か此の深き聖旨を誤るものぞ。あゝ友よ、雨の日風の晨、心を靜め身を安むじて神を稱へ神の限りなき恩寵を感謝せよ是れやがては吾等が最も麗はしき信仰生活の第一歩たらむ也。

宗教と生死の觀念

うつせみの世たちはなれて
主のもとに行くをなど死といはむ。
涙宿す目は閉づれど
さかえにさむるをなど死といはむ。
世のほだしの解きさられて
あまかけりゆくをなど死と云はむ。
生命の君わが主エスに
めさめしみたまは永はに死なじ。
（讃美歌第三百三十五）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

櫻香生

古昔、希臘の哲學者エピキユラスは其が哲學說の中に「死」を論して曰、「人は死を以て惡鬼の如く蛇蝎の如く恐れ戰慄くと雖も、果して死なるものは、然く恐怖すべきものなるか。思へ、死の來る時、吾人は既に此の世に在らざるに非らずや。死の來襲る刹那は、吾人が既に未來永刧の天地に遊むで、嬉しき天國に上りたるの瞬時也。死を恐るゝの念慮、所詮は是れ死なるものが吾人生存の中に來るてふ一種迷朦的謬見の結果に外ならず……」

エピキユラスの死論や夫れ此の如く簡單也明瞭也。元よりも極めて淺薄なる皮相的一部の死論たるに止まると雖も、吾人は此の樂觀的死論の中、確かに無量甚大なる眞理と興感との潜在するを疑はず。何ぞや、彼が死に對する美的一味の詩趣は是也。

球圓坤上天地無限、其の間蠢々爾として生息する者、人類同胞に非ずや。吾人元より自ら卑下して極微甚小の境致に齷齪するを欲せずと雖も、悲しいかな宇宙の御胸、造化の眼よりして是を見むか、實にや是れ天地穢土の一塵、蒼海萬波の一沫のみ。蠢々焉として嗟呼夫れ危い哉!

古諺子謳うて曰、「糞中の蟲は其の臭を知らず」。「鹿を追ふ獵夫は山を見ず」と。嗟呼朦執の雲、身邊四周を鎖し誘惑の胡蝶翩々として花間に戲る。生來薄弱可憐の人子、唯一意人知に依賴し皮相の觀に驅られて、上に宇宙の大を認めず、心眼に造化の無窮なくば、嗟呼彼の糞中の蟲と何ぞ撰ばむ。憐れむべきは此等未明の生物なるかな。彼等元、薄弱細小、朦執誘惑の朝霧に包まるゝと雖も、悲いかな是を悟徹し觀破するの靈能なき也。唯一意人爲人力に依賴す。此に於てか過失悔恨挫折の跡は絕えざる也。失望落寞悲觀苦悶の情は滅せざる也。然り矣、吾人の一言一行、是れ神の力、造化の御旨に依るものと自覺し悟徹し能はざるもの、所詮は是れ未だ宗敎の門に達せず神の御國に入る能はざる衆生凡夫の常狀也。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『吾人は如何にして此の世に生れ來りしや!?』此は無用不可解の疑問なりとするも、苟も天地宇宙の一隅に浮游し、心身靈能を具足し、孜々營々として現世に生息する以上、何等か奥妙深秘の意義なくむばあらず。噫、讀者よ、吾人の中幾何か此の意義を了得し得たるものぞ。謂ふ勿れ是れ無用不斷の謎語と。吾人は如何に生き、何を爲し、如何にして此の世を辭すべきか位は、人類といふ名目に對しても既に一應の研究と吟味とを了したるべき筈なり。世に若し自己生存の眞意義すら辨せざる者ありとせば、所詮は是れ不具未明の人、深く人生の問題に突入し、宗教の奥扉を叩いて眞に靈的問題に關知する能はざるもの、豈ぞ宇宙奥妙の道を究め、神の眞意を明かすの資格あらむや。

さもあらばあれ『吾人は如何にして此の世を辭すべきか』讀者諸子は思を此處に馳せたる事ありや。

吾人は世俗一派の人子が、此の如き問題を云々するを以て、直に病的ペシミズムの言語を弄する者と嘲らむことを恐る。然も、空に星光輝き四邊騷呼の人聲絶えて、松風颯々、天籟の聲切りなる靜夜、靜かに汝が半生を顧みよ、胸に寂寞の感はなきか、慚愧悔恨の涙は狂はざるか、嗟呼吾人にして若し深く思ひを自己生存の上に馳せ、過去を顧み現在を思惟し、靜かに穩かに人生未發の行手を想はゞ、如何で其處に宇宙極美の力なからてやは、如何で其の刹那天地神來の一閃なからざらんや。

希臘デルファイの神殿に一扉の額あり、曰く『己れを知れ』と。

嗟呼、吾人生れて玆に二十有餘年、五十年百年にして猶ほ自己の何たるかに思ひ至らざるものあり。『己れとは抑何物ぞや?』是れ最易にして至難の大疑問には非ざるなきか。

重ねて問はゞ『己れとはそも何物!?』曰く『薄弱無知の者!』嗟呼是れ世界哲學の父、大聖ソークラテスが翻然として悟導了得せし最初の聲に非りしか。自已の無知なるをも知らず、自己を以て絶大の力なりと自負し確信するもの、豈唯ソークラテス當時のグリース

國民とのみ謂む。嗚呼自己の無知なるを悟らざる國民、愚昧無殘の傳道者、世に是より耻つべき可笑事のものあらむや。

我等の主エスキリストは、彼の美し妙なる山上垂訓の第一に於て弟子に敎へて宣へり。『心の貧しき者は幸也、天國は即て其の人の者なれば也』と。

嗚呼、自己の無知なるを知らず、揚々として神の意を得たりと傲るもの此の聖句を何とか見る！　吾人は常に心を空うし無知なるものと信してこそ始めて神の崇嚴美妙の御姿を宿すべし。自ら稱して知者を衒ひ、眞理を了得し得たりとなすもの、嗟呼夫れ禍なるかな。

翻て問はむ、宗敎はそも何をか敎ふ!?

吾人は此の疑問を解決するに先ち、便宜上先づ基督敎は何を敎へ、佛敎回敎は如何なる悟導を吾人に附與するものなるかを一考せざるべからず。

一切朦執の『我』を滅して眞如の光を仰ぎ、一意祈念精進して涅槃の極致に入り、西方億萬土なる寂光淨土の天地に麗しき蓮花の御園あるを敎ふるもの、是れ佛陀の敎旨に非ずや。

一切の「我」を絶滅して天なる神の御前に捧げ、一意自己の罪を懺悔して忠實なる撰民となり、一念純潔强固なる仰信の御力に依て天國に入らしめんとするもの、是れ我等が信する耶蘇基督の御敎へに非ずや。

然して其の天國といひ、蓮花の御園といひ、乃至は涅槃極樂と謂ふ者、抑又何をか示せる。所詮は是れ『安らかなる死』其物に非ずや。人生の歸趣、最後の住地に非ずや。換言すれば如何にして死すべきかの道程に外ならざる也。要するに宗敎は是れ安らかなる死を敎ふるもの、價値ある死、貴き死を吾人の前に提供するものといふべし。嗟呼、安必立命の心、是れ佛耶を問はず、回婆の別なく、あらゆる宗敎あらゆる信仰が吾人の胸を動かし、吾人の耳朶を打つ一種端嚴美妙の獅子吼に非ずや。

There is a Special providence in The fall of a Spallow.

If it is be now, it is not to come;
If it is be not to come, it will be now;
If it be not now, yet it will come:
the readiness is all!

天地自然の中、一羽の雀の落下するも是れ決して無意義の者に非ず。其處には必ず天の攝理の表現せられたるを疑はず。若し現在死の襲來することあらむか、未來に於て再び死の來る恐れなし。未來に於て死の訪問を受けざる者とせば其は現在に於て來るべし。よしや亦死なる客人が現在導れ來ることなしとするも未來に於て早晩免るへがらざるもの、苟も人類として此の世に活動する以上、上は王侯貴族より下は田野の匹夫に至り、到底此の境致を脱却せんこと難し。あゝ友よ、平素死に對する心得覺悟こそ肝要なれ!

是れ英文壇の明星シエークスピヤが、其の傑作四大悲劇の中、特に後世人士をしてワンダフル、キヤラクターとして嘆賞鑑美せしめたる「ハムレット」公子の口を借りて死に關する一部の思想を洩したるもの也。

あゝ、「友よ平素の心得覺悟こそ肝要なれ」何等深刻美妙の言辭ぞ。吾人苟も現世に孤影を横え、生存生活の妙を歡受する以上、一度此の境致を踏むは是れ人類生物として到底免るべからざる宇宙自然の大法也。嗟人類人子にして「死」は早晩吾人生涯の上に落下すべき境涯たるを知らば、生を考へ死を想ふ。決して無用の徒事と謂ふべからず。頓ては是れ人間一大事の本務たるべき也。

斯く觀じ來れば、彼の一意競々然して生を歡喜し命を求め、死を見る蛇蝎の如く惡鬼の如く、戰々競々たる一派の人を目して、友よ愚民凡夫とは思はざるか。唯一意生を欲して死を樂しみ得ざるものを以て、友よ未信無明の可笑事とは想はざるか。嗟呼生の美にして喜ぶべきと同時に死も亦美にして喜ぶべき者には非ざるなきか。彼のゴルゴタの地に於て、十字架に上り乍ら尙ほ敵人の爲に祈念し給ひし主エスキリストを見ずや。或は叉沙羅雙樹の葉陰涼しき祇園社頭に於て無常を告くる晩鐘の一杵と共に安らかに涅槃の境涯に入り給ひし大聖釋迦を見ずや。如何に悠揚自若として「死」其の物をも樂しむべく喜ぶべきものと敎へ給ひしぞ。嗟呼是れ信樂極致の賜、メシヤと佛陀とが吾人に與へ給ひし至大至高の福音に非ずや。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

友よ、死を考ふるを以て、一圖に病的ペシミストとなす勿れ。死を思はずして生くるは是れ夢中無意義の中に生くる者、所詮は矇執無明の世界に生くる也。無意味の生、矇執無明のライフ、嗟呼吾人は咀はんとする雙手を收めて先づ其の憐れむべき人子の爲に祈念し俯伏して、天なる神の恩寵を求めむかな。

要するに宗教は吾人をして此の憂苦を脱却せしめむが爲めに、麗はしき光と微笑む如き愛慈とを以て安穩高貴の死を教ふるもの、畢竟死を考へざる者は生存の價値なきもの、信樂の念慮に乏しきものと謂つ可き也。

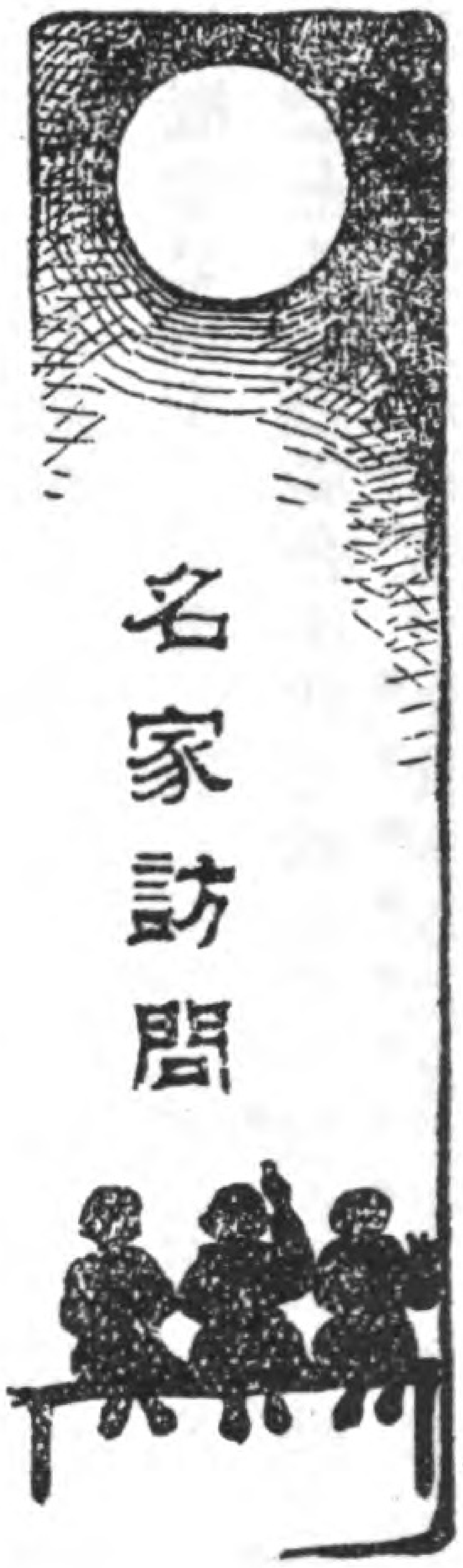
嗚呼揚々乎として晨に新美の曙光を漲らし、覺醒皷舞の色を湧かす者、是れ旭日の美に非ずや。

暮雲を五彩に色どり、天上の彼方寂滅有樂の境涯を浮べ、天國の美を匂はするもの、是れ落日夕陽の美に非ずや。

旭光を見て美なりとし、夕陽を觀て醜なりとする者、我れ不幸にして未だ聞知せざる所、あゝ晨に天地を照らす旭日の美、暮に平和と寂美とを與ふる夕陽の色、共に美にして聖なるもの、一は生の薰り、一は死に行く平和、畢竟生死は是れ一體同心にして到底二物の性に非ず。吾人不肖、世人が何の故に唯一意生を欲して死を恐るゝやを理解するに苦しむ。

『落日夕陽の美と人生の終焉』吾人は異日稿を改め筆を洗ひ、更に此の興味ある問題に就て、少しく研究し解說して讀者諸子と感興の一半を共にせんことを期す。（完）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



兒童と宗教

巖谷小波氏談

前に品川の銀波を瞰下し御殿山の高臺綠樹滴る邊、小波巖谷先生を其の邸宅に訪ひしは昨年の暮クリスマスに近い日曜日の午前であつた。應接間は書齋を兼ねたる楷上六疊の一室で今日はテーブル椅子の西洋式になつて居る。案内を乞ふて楷段を上ると既に「ヤア」と例の隔てなき聲が聞えた。「樂天居」と金緣に銘打つた伊藤春畝公の額面に對して座に付き、一應の挨拶と草々の談話の末兼て我が最も興味ある研究題材たる「兒童と宗教」とに就て有益なる高話を聞くことを得た。此の一文は當時高話の大要を後で記し付けたものて文責は勿論記者にあることを承知して貰ひたい。………（一記者）

一概には謂へぬが西洋の兒童は比較的宗教趣味が多分てあるやうに思はれる。のみならず神と云ふ觀念が日本とは大部違つて居るやうで恰かも日本で天皇樣といふ感念と相一致して居はせねか。一體小供といふ者は如何樣にもなるもので、敬神家の家に生れた者は屹度宗教心は深いてしようね。

いや君の云はれるやうに小供には別に宗教心などいふ者は先天的に具つて居るわけてはありますまい。何も彼も人のするやうに模倣するのが小供の大なる特質てすからね。

『小供から不意とした時分に住々非常に深いそして極めて手短な疑問を出される』場合は折々ありますね。其の時分には先づ一の概念を與へるより外に良い方法はありますまい。例令は今お尋ねになつた『風はどうしてふくか』といふやうな問を出された場合などにはなまじいに『風は空氣が流動する結果である』などゝ說明しては駄目てす。さうなると空氣とは一體どんなものか……又之を說明してやらねばならぬ。かくて話は愈枝葉の方に向つてきて其の說明を益々繁雜困難ならしむる一方だから理論的の說明法などは成るだけ避ける方か宜い。そして概念的に風は風の神樣が吹かせる。風の神は力の強い、勢のいゝ、そして大きな袋

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を持つて居る神様……といふやうに實際的に具象的に説明してやるのです。さうすると小供は（もし男の子であつたならば）其の勇ましい男らしい風の神を想象して非常に嬉しがる。のみならず、小供の頭腦をして漸次に空想的感念を盛ならしむることが出來る。

空想の弊害ですが。いや私は小供時代に空想的感情を錬らしむることは別に差支へはないと思ひます。否弊害などは斷してあるまいと信じて居ります。

一體小供の時代は極て空想の盛に湧いてくる時期で實際海の底には立派な宮殿があり、お月様の中には兎が居ると信じきつて居るのです。此空想的信念は別に敎育上裏ふべき弊害ではありませぬ。成人し發育するに從つて自然に此の架空的比喩的の事實に思ひ至つて眞理を好むやうになつてまゐります、之は人間自然の徑行で共通的の事實です。だが一つ小供に此の架空的概念を與ふる時分に特に父母及び敎育者の注意すへきことは此の場合に於て成るべく試らしい噓を避けて「譃言らしい譃空」を敎へることです。いはゞあつさりとした無邪氣な架空事を敎へることです。

勿論小供は大きくなるに從つて其の比喩的であつたことに氣が付くのですが、其の楷段に到達する迄に一種の發見的感想を錬らしむる動力が必要です。之は大に小供を敎育する人乃至は小供の世話をしてやる人々の注意すべき事柄で、例證を引いて話しを聞かせる上に於ても餘りに殺伐な亂暴な野卑な概念だけは大に愼むて貰はねばなりませぬ。

談話は暫し横道にそれて幼稚園問題に移り小供の空想を錬る上に就て又兒童敎育の上に於て幼稚園なるものが如何樣な功力がありましようか……との問に對して。

さうですね、一體小供といふ者は馬鹿に自我の觀念が强いもので一方人に見倣ふ性質があると同時に他面に於ては飽くまでも自己を貫徹しようとする一種主我的の努力があります。だから押し付け主義に「あの方と遊びなさい」とか「かうなさい」など强られても仲々聞き入れないことがあります。私の小供なども幼稚園に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

入れましたが、どうも成績が良くないのです。家を出る時分は大變に元氣が宜いのですが、歸りには屹度泣いてくる。男の子は人樣の前に出ると畏まつて居ておとなしい方ですが、女の子はちと亂暴なものですから、どうしても幼稚園て「あゝなさい」の「かうなさい」のといはれることが氣に喰はないてしよう。一體幼稚園は、中以上の家庭には餘り必要はありますまい　西洋ては殆ど貧民の家庭學校になつて居る位てすからね。

幼稚園出の兒と家庭から出た兒との相違てすか。成る程小學に上つて敎師の前に出る時分には始めの間は屹度幼稚園出の方が規則的て、能く先主にも懷きましよう、が半年たち一年も立つたらおんなじてしようよ。別に甲乙はありますまいね……

此の頃は大分日曜學校が盛になりましたね。左樣東京だけも百位は確かてしよう。佛敎の方ても近來小供の敎育に眼を注き出したのは喜ばしい現象てす。小供と宗敎といふやうな問題は追々と喧ましくなりさうてすから一應研究を試みて置く必要は十分あらうと思ひます。云々。

水の姫君（第三回）

辻村靖子譯

そこて此の女についての昔はなしを、夜と共にきいて、さらりと理解りました。

此老夫婦は往昔から、こんな溪底のやうな孤島を、唯一無の樂土として、老爺さんは毎日湖へて漁業をする、老媼さんは近い山て瓜先をとつたり、蕨をとつたりして、中よく二人生活して居ました。所が遲くまて子がなくて段々心寂寥しさを覺えてくる、四十の坂をこえて、ふと懷胎つて生れたのが、玉のやうな女兒てした、だから二人とも下へも置かず鍾愛して、三つの秋まて育てたのてした。所が此子の行末を考へると兩親はついに覺えぬ心配の種が發芽だしたと、云ふの

は外てはありません。自分こそは、猪猿や蝦や魚を侶にして一生を送るも可いが、せめて此子は世の中へだして、人並の幸福をみせてやりたい、親の欲目か知らないが、醜くもない容貌で、加之に決して馬鹿で無い、どちらにしても此子が學校へ行くやうになつたら、思ひきつて此茅舍は住みすてゝ、市街の近くに引こさゞなるまい。

心仕度をしてみると、又何となく舊い棲居に、心殘りかせぬてもない。たとへ二疊一間でも、我ものとして永い間、臥たり起きたりした所てすもの、使用ひなれた背戸の筧の清水も、都へ行つたら、こう重寶にはあるまい。丹塗のやうな柿の實の、枝もたわゝにみのるのも、空しく烏に啄ませるのだ。こんな氣樂な境界をすてゝ、せゝこましい世智辛い市街すまひて、一辛酸するのかと思ふと、又夫も一思案てあつたのてす夫ほど望をかけて居た大切な大切な女を、過失とは云ながら、不慮に亡くしてしまつたのは、恰度七月の二十日のことてす。老爺さんは例の通、漁へてゝ、平時より獲が多く畚のふたがてきぬほどたつたので、つい面白さに黄昏ころまでうか〳〵と居て、暗黑くなつてから、のつそり明放し自宅へかへつてみると、ひつそりとして人影もない。もう點燈もついて居なければ戸も明放なしになつて居る。はて何ごとか異變つた事がてぎたのぢやないかと腦を悸々させながら、草鞋を脫ぎすてゝにじり上ると、蹶つまづいて吃驚したのは宛然氣を失つたかと思ふやうに、泣倒れて居る女があるのてした。それは自分の妻てはありませんか、まづ氣かゝりなは小兒の聲もしないことてす。顫ふ手さきにマッチを擦つて、倒れて居る妻をよび活けると、泣き腫した眼をあいて、夫の顏をみると齊しく、復泣沈む妻をみて、問はずと知れた大方ならぬ凶事とさとりました。

「どうしたのだお愛はどうした留守に何か自宅に事變が起つたのか、しつかりして呉れなくては不可い、これ」「面目ない、とんだ過失をしました……」

妻は聲も止斷れ止ぎれに、辛うじて物語つたのは、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

更に夫を驚殺して、餘のことに涙もでません、此日はなぜか起ぬけから、子供の機嫌が悪いのです。其くせ額に手をあてゝみると、別に熱があるやうすもない、大方寐冷のせゐでゝお腹でも痛めたのであらう、食物にきをつけたら、つい平癒るだらう、とは思つてるのですか、兎角に焦燥れて泣きたくて、風車でも風船でも手をだすのでもありません。そこでお母さんは一日お守傳をする積りて、成丈風にあてまいと、家の内に居たのですが、狭いうちのとてすから、實にあきてしまつて、外面へ行かう、外面へ行かう、と指さすのてす夫から背負して、二歩三歩外面へでゝ、二坪丮ある庭の紅い酸漿をとつてやつたり、崖際にさいて居る野薔薇をとつて持たせてやつたり、夫ですつかり機嫌が直り、笑顔もでゝきたのて、自分も一日内に居た欝悒のあまり、何の氣なしにふら〳〵と、湖の汀にたゝすんだのです。折節空は雨上りの紺青色の森林の蔭と、烟のやうな湖と、もう夕もやにつゝまれてさゝなみもたたぬ夕なきに、底のぬなはも見えすくかとばかり、しばらく覗恍れて立つて居ました。ずると水の中に何か見えたか、背中の子は頻にみ手てをして、彼を彼をと欲しがるのです。

「危い危い靜止にして何小さい魚かみえた?」と云ひながら注覗ても、何にもみえるものはないのです左の肩を振りさまこのさす方と子の水面とにらみくらべても何か分らぬ。只落ちそうに身をもかいて小さい指て、さす丮りとふまへて居た。足下の土かとうしたはづみか、ざくりと壊えて、はつと冷汗をかいた一刹那我身は半身水に濡れたまゝ、危く岸の櫟の根にすがつて、仆れも沈みもしなかつたのですか、夫よりか大切な身にも命にもかへられない、最愛の一人子を水烟たてゝ沈めてしまつたのです。母は殆半狂亂で、其身をからく支へるや否、濁水流の中は二足三足さぶりてことふみかつたのですか、一歩は一歩と水は深く、藻は繁し泥は深し、ことに水底は矢を射る早さで、もうどうしてもしかたはありません。どこをとう歸つたか足も地につかすに我家の敷居をまたぐと、悲哀しいの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と辛苦いのと、申譯のないので胸も張りさくやう、身を投伏して泣き入つたのですか、夫からどうしたか記憶がないのでした。お老爺さんは呆れて涙もでませんせめて死體でも上ることか、とう／＼夫もみづからず仕舞。かたみに殘る小さい着物も、人形も、繪草子もみれば涙の種となつて、老爺さんは漁業にてる元氣もなく、老媼さんもぼうつと氣抜けがして、暇さへあれは考へてことをしたり、佛壇に向つて愚痴を云つたり、濕つぽい陰氣な二月ほとを送つたのです。すると丁度四十九日の逮夜と云ふ晩、二人も濡つぽく泣きくらして居たのですか、嗚呼いつまで起きていた所が、詮方もなし、早く戸をしめて眠ることとた、睡るまもせめて忘れたいと云ふので、老媼さんがたつて戸閉りをしやうとてゝみると、人が鬼か、秋々と入口で、咽泣して居るものかある。老媼さんは毛の根の監つほどに驚いて、曇つた眼を拭つてよくみると、抑まあ戀しいと思ふ、一眼の迷ひか、我子によく似た美くしい氣高い少女て、麥藁の帽子を被つて水淺黄地に金魚に藻の花の友禪染を染めたのをきて、赤い帯を小さく結めて草履をはいて居るのです。老媼さんの顔をみると涙を拭いてすこし嬌羞みながら、うれしそうに莞爾と笑つたのです。やれ／＼可哀想に、何所のお子、どうして今ころ此所あたりにと、疑ひ訝る暇もなく、老爺さんも出てかはる／＼、種々に云ふて内へ入れました。手足は氷のやうに厥冷て、衣服も何もしつとりと、濡潤れて口をきくのも大氣そうに、疲勞れはてゝ居るやうなので、まあ可いは、今夜一晩とめて置いたら、兩親か從者か誰か知らぬが迎えに今にくるだらう。恁思つて甲斐がいしく、濡れた衣服をぬきかへさせたり、汗やほこりの身を拭ふたり、熱いものを拵へてたべさせたり夫は夫は親切に介抱しました。よほど疲勞れて居るやうで可愛らしく居眠りなどこくりこくり始るので、老媼さんは凭かられたまゝ抱寢をして、其夜はわざと何こともきかすに、そうつと朝まで寢かしたのです。さて翌日になつても、翌々日になつても、尋て來る人もなし、其處も又、自宅を戀しかるでもないやうすもあ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

りません。二日經ち三日たち、大にしほも解けて來ましたから、徐々とお父さんや母さんのことを問ふて見たのですか、返答が一向に要領を得ぬのです。どこから來たときいてもやはり同樣、

「私あつちの方から來たの。紫貝だの石だの澤山ある、水晶の宮殿から、」

「ふむ、ふむ、水晶のおみやから、そこにお父親さんや、お母親さんも入らつしやるのだね？、」

「お父さんだのお母さんだの、私知らないの、」

發明な性質であるが、身元をきくと一向理解らぬ答をします。まことにもどかしいのですか、餘りにくどく問訊いて、泣かしても不可いと思つて、夫婦も夫からはよく尋ません。

年月重ねるうちに、もうすつかり親昵んでまいりました。今若目前に此子に親があらはれて、段々との禮をのべて、取戻しにてもみえたらどうてしやう。一人は急遽ふためいて、抱いて取かくしするてしやう、一人は事情を打あけて、縋り歎願いて是か非ても離すことてはありますまい。從つて亡兒のことも忘るゝつもりはないが、いつとなしにまた忘れて、今の子の世話に、朝夕に追はれて夫婦は自分たちのよる年波も忘れるほど目も鼻もなくして、餘念なく、可愛がつて居たのです。只時々不審して双親か顔を見合せたり、耳を欹たりすることがあるのは、すやすやと眠て居なから、片言て「黄金の鱗の光つてるお屋根が見えて……：鳧鳧こち寄れ、和女の雛はどこへ行つた」などゝ妙なことを云ふのです。顔をみれば罪もなけに、うとうとと眠入つて居るので、なにか夢みて居るのだらうわからぬ言を云つてると弖思消して居ましたか、そんなことか度々あつたので、お老翁さんか終には、仔細らしく頭を傾げて、

何さま、この子は卑賤しい居宅て育つたのぢやあるまい、萬一したら月の世界からでも降つて來させつた化性のものかも知れ無い、」

と氣味わろくも思つたのですか、外には何の變つたこともなし、愛くるしい佳い子て、老爺さんか稼に行

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

からとすれは、一所に連れてけと云ふて、やんちやを云ふ、老媼さんか、すこしみえぬと、べそをつくつて慕ふので、只もう譯もなく可愛い〻可愛い〻ものになつて仕舞ひました。

もう自家の子になつてしまつたのに、何時々々までも孃さまでは、何だかそこに隔かあつて、面白くないちやあないか、一つ名をつけやうと云ふので、相性をくつて彼か此かと、二人て、評議をこらして居ると、少女は小耳にはさんだとみえて。

「私の名は君ちやん。」

「はあ、君ちやんて云ふのか、夫あよかんべい、」

てく壯健て、世話なしに育つて、今年はとつて十六になるのてす。世間の少女ならは、髮形に氣をつけ衣裳のきかたも大人びて來るはづを、いかに浮世の外の山家といへ、まるて男の子のやうに、木登をする泳ぎをやる、あまりに惡戯かすぎるので、いつもいつも老媼さんに、蒼めかれてをるのてすか、女らしくして絲をつむいたり、綿をくつたりする業は可厭ていやてたまらぬのてしやう。二時になつても歸つて來ぬ、三時をきいても音もせぬ、容も主人も談話しの興もつきて其まゝそこに居ところ寐をして、曉の寒さに目をさますと、もう東の空は白んて朝鳥の音聲も稀にきこえる。

昨夜はどうして明したか、人より高い雑草の露を枕に起あかしたか。夫とも岩かねの嵐の床に疲勞れはて〻熟眠て居るか。

お老爺さんと青年とは、天明を持ち兼ねて、二人連立つて、大森林から湖の方へと捜索にいつたのてす昨夜の雨は一しきりて霽つたか、この間から打つ〻いての降雨に、山川は水量かまして、獅子の吼え狂ふやうな其ひゞき、白雪をとばすやうな其飛雪、空はまだまだ一荒あれそうな怪しい黒雲に鎖されて、も折る〻かと許りて空合て森林の梢陣に吹きある〻暴風は魔神か叫ふか木魂か呻吟ふか、物凄ましい音響をたつるのてす。いかに大膽ても執性でも、そとて一夜の安眠をとるとは、人間のすべきしはざてない、泯ししたら、

また魅せられて居て、老爺さんも老媼さんも乙女も何かの靈て自分を愚弄して居るのてはないかと、客人は實に心ひそかに迷ふたのてした。妖怪ても何てもないお老爺さんの方は地理をよく知つて居るので、先にたつて森の中をずん／＼いくと、大な楠の枝さし蔽ふてしめ根は仕石しても居りそうな其横手のほらの中て、白くうごめくものかある、客は思はすあとざりしたのてすが、老爺さんは馴れたもので、少とも怕るゝ體はありません。進よつて衣のはしを引うとしたか、一度ては更にめがさめぬ、そこて客も後からさしのそくと、すやすやと心地よさそうに落葉の床をかたしいてあの花の姿は寢て居たのてす。引おこされて、立たされて、左右から言を云ふ、いたはるやら慰諭すやら

「何故こんな寂しい所へ、一人て來て眠たのてす。自宅てはとれほど心配したか、早く父さんに謝罪りなさい。」

少女はあどけなく點頭いたのてす。

「私だつて冷たい木の下へ眠るのは、本當は故好ぢやあないのてすけど、お父さんか余りだから、」

「なに、あんまりなことかあるけえ。止せ止せちふと諾かねへから、」

「そうてす共、和女の方がわるい。今すこし順從にして、よく云ふことをきかにや不可。」

「だつて和、折角面白い談話しをきゝかけて居るのに、いろいろな邪魔をして叱つてばつかり。

貴郎のやうにやさしく云つて與れゝは、私だつて發憤りはしません。私いつそ、誰も居ない此森林て、あなたと二人つきりて棲んて居たい。夜はすこし、寥寂しいには寥寂しいのてすけど、晝まになれば木のかげもあり、花もあるし禽も鳴いてるし、こんな所て種々のことをして、遊ぶ方がいくらよいか知れない。

「そんなことを云ふ者があるものか、父さんや母さんが、それこそどんなに心配なさるか。」

「父さんや母さんか、心配したつて私ちつとも構はない。」

「いや之は驚いたことを云ふ。夫なら和女は一人て

居るさ、私はもう父さんと一所にかへる。」
　すると少女は吃驚した體て　がつばと身を起しさま
青年の手を握んて、
「貴郎かへるなら私もかへる。其代り昨宵の談話ね
彼のつゞきをきつとして下さいね、父さん可いのでし
やう？」
　餘りの無邪氣我まゝて、殆と小言も云れぬのです。
「あゝ談話して上けるとも、さあとも角も早く行か
う、こんな所へいつまでも居ると、衣も何も濕潤つて
しまふ。」
　三人連てかへつて來たのが、もう朝飯の時分てし
た。
　若しかへつて來たならばきつと責譲めて、夫から自
宅へ入れやうと、かたく決定るたのですが。顔をみれ
はすぐ氣か弱くなつて、客のてまへもあり、あまり小
言もいへぬのてした。

（つゞく）

＊　＊　＊　＊　＊

「女夫波」を讀む

秋郎

私の冷たい胸に暖かい空氣を入れて吳れた樣な氣がして親んで讀んで居たのは田口掬汀氏の女夫波てあります。私は掬汀の名を見る每にかの米のホーソーンを思ひ起します。其は共に愛のこまやかなるを寫したと云ふ事て、私の若い胸に染みこんで居ますからてせう。私は女夫波を三度讀みました。一は新紙上て一は劇一は本になつてからのことゝて、女主人公植村俊子の悲慘なる境遇を見ては堪へ難く泣いたのであります。然しながら三度目讀んだ時は一種の光明に觸れたのてあります。

　かの植村夫婦が桃咲く頃、片瀨海岸の新婚旅行は一葉の電文に驚かされ、期まどかならずして、夫は直に洋行の途に上るべく倉皇歸らざるをえず。妻はまた心拈拗れたるてもどりの、夫の姉時子と共に小さき家を守ることゝなり橫濱埠頭の熱き淚、かたき握手を以て

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

潔く送別れた後と云ふものは、俊子は時子の爲に苦められ、殘虐至らざるなく、生活費をも全く奪はれ、又戀かたきの爲に計られ虐げられ、生活の自由を殺がれ、のみならず罪なきに架空の罪を新紙に傳へられ。殆ど有ゆる辛酸、あらゆる痛苦を投げられたるにも拘はらず、俊子は良人を想起し、良人に憧れて萬難に堪ふるの資となしたのであります。曾て温かな順境に處したる愛が、逆境に處して益々光明を放つたのであります俊子は一向に敵を怨むることなく、たゞ良人の一念、彼女を勵まし彼女を鞭韃し、何處までも忍耐を生ぜしめたのであります。

徹歸朝して妻の顔が見る目も凄く憔悴れたるに驚きたるを見て、その如何に留守居が痛苦を極め辛酸に陷りしかゞ分明るのであります。彼等の遭逢眞に涙の外にはなかつたのでありますす相抱いて石の如く佇立すること多時てありました。

天日愈々明にして行くこと矢の如し。彼等夫妻が再び新生涯をえて任地亞米利加に行くとき、時子の遺子礎太郎とまたその戀かたぎの家なる日頭男の子淸をも伴ひ、數多の歡喜あふれたる所の出送人の中に、多くの羨望と多くの信賴とありあまる榮譽とにつゝまれて行く、其の光景何等の痛快事ぞ。胸は光閃めく樣に覺えて私は思はずさかんなるかなと叫んだのであります。

著者の意や即ち淸純にして深厚なる愛の力は如何なるものをも抱合融和すべきもので、人の世にある力の最も强いものは愛の外にないと云ふ思想を象つた所にあるそうであります。實に俊子の愛は純愛でありませう。智情意を供へた圓滿な愛でありませう。

如斯愛が神の愛でありませう、我等はこの神の愛によりて立つとき人類を救ふの念も起り國家を愛する念も起るのであります。家庭の愛も起り自己を愛する念も起るのであります。神の愛が本體で自個の愛は枝葉であらうと思ひます。キリスト曰く、我れ我が愛は眞の葡萄の木にして爾等は其の枝なり。人若し我に接らざれは實を結ぶこと能はずと。即ち自己の愛が單に自個のために愛する樣になれば亡ぶると云ふ意かと思ひ

ます。誠にキリストの愛は「爾等の敵を愛せよ」「悪に敵する勿れ」これてあります。前者は積極的體度で後者は消極的體度てありませう。これは行はれ難いと云ふ人がありますが俊子は其一模型てはありませんか。イエスキリストは明かなる模範を示されたのてはありませんか。トルストイ翁の悪に對する絶對無抵抗主義は確かに有ゆる矛盾を切りほとく鋏てあらうと思ひます。この最高理想を行ひえた人には眞の慰安眞の平和が胸に湧くことゝ思ふのてあります。

人生はとゞの詰りまて大なる悲劇（グランドトラゼディー）てありませう。其を心得て神の喜に入らう入れやうとするのが吾人の努力てあらねばならぬと思ひます。我々は夫婦の眞愛即ち神の愛によりて育てられたるもので神の愛に歸るべきものてあらねばならぬと思ひます。故に生涯を擧げて神の事業即ちトルストイの所謂神を我と世とに明にせんと務めなければならぬと思ひます。神にかへるとは永生（エヴァーラスティングライフ）に入ることてありませう。地の美しき生活がやがては天を戀ふる思となるのてせう。吾々が精勵刻苦してきたいあげた品性が天にも地にも感應なくしてはやまぬと信じます。かの空飛ぶ鳥の聲だに地に美音をとゞむるてはありませんか。

思ふに愛は永久かはらず人の心に活きかへるものでありませう。故梁川氏は愛の發作は已れを忘れしむるもので、然し我を殺して活かすものは又この愛であるそして愛によりて已れを棄つるは其處に聊かの苦悶がなく、中心の喜より發したものでありますから義務によりて已れを棄つるのとは非常に違つて居ると云はれて居る。キリストは實にこの愛を體讀した人てありませう。實に吾々は感恩報謝の念を以て喜んで事に當ることが肝要だらうと思ひます。其に就ては神の至愛にふれて來なければならぬと思ひます。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

琉球雜話

仲宗根龍山

琉球について何にか書いて吳れないかと云ふ編輯者からの御依賴がありましたけれどもこれと云つて別に珍らしいこともありませんからざつと大體を御紹介致しませう。先づ琉球と云ふ名稱の沿革から申しますれば琉球は最初は琉虬と名づけたと云ふことは中山世鑑にも見えて居ります、それは蛟龍の海上に浮べる如しと見て名づけたとある、それから流求となり更に瑠求となる明の洪武中に今の琉球に改めたそうです。

位置は本州の西南で東京から行くには大阪まで汽車で行つて大阪か神戶で乘船するのです、船は大概一週間に二三回あります此船は內海を通り二晝夜で鹿兒島に着きそれから一晝夜で琉球の那覇港に着きますが大抵は鹿兒島に一泊するから大阪を出て五日目で琉球へ參ります。

氣候は甚だ溫かで極寒と申しましても綿入等は餘り必要を感じません、其代り夏は少々暑いけれども東京とは大した差はありません唯だ朝と晝或は五六月から八九月末で溫度の昇降が烈しくないと云ふまでのことです、斯く冬でも暖いから勿論草木が枯れるなどと云ふことは無い、四季を通して山野青々として居る、それだから私の如きは秋と云ふことは東京に來て初めて感じた次第で向ふに居ると秋の淋しい觀念などは全く起りません。

こんな有樣ですから雪は元より降つたことはない霰が降るさへ極稀れで四五年に一度位のものでせうと思ふ。

暴風は琉球の名物です、毎年少なくも一度は暴風がある、その爲め農作物に害を及ぼすことは少なくない此の暴風は東京等ではとても想像の出來ぬ程ですが甚だしい時は大きな木や家を倒すことが間々あります。それで琉球の家屋は丈夫に出來たものです。屋敷の周圍に高い石垣を造り或は大きな樹木等を植付けますがそれ等も多少此の暴風を避ける爲めに出來たものと思

ひます。

物産にも乏しくはありません砂糖、泡盛、漆器、細工布、芭蕉布 縞木綿等はその主なものでせう、皆さんの御好きな薩摩芋も其の本家本元は琉球です、それて薩摩ではこれを琉球芋と稱へて居ります。

琉球は遠い群地の割りに教育は昔から盛んであつたらしい昔は寺小屋とも申すべきものが各地にありましてそれを村學校と稱し其の上が平等學校それから國學と三つの階段がありまして盛んに教育の普及を計つたものと見えます。今日の普通教育も盛んなもので中學師範高等女學技藝學校商工農の各學校があつて何れも充分の設備が出來て居ります。

琉球には根底を固めて居る宗教は昔から無い樣に思はれる、強いて本島に行はれてゐる宗教を求むれば、それは臨濟、眞言の、二宗に過ぎない、それも其の筈、昔は此の二宗の外は一切信奉を嚴禁し若し犯すものがあつたら流刑に科せられたそうだが、廢藩置縣後その禁を解いてから近年初めて眞宗が傳はり本願の別院が那覇に設けられた位です、それで佛學や佛教史に就いては深い歴史が無いと云つてもよい。基督教も近頃傳へられたが未だ〳〵前途遼遠とのことで私は村井、本田の牧師先生方が神の御國建設の爲めに遠き琉球まで御出でなすつて下さつたことを深く謝すると共に其の植付けられた種子がよき實を結ぶことの近きにあるを信じます。

琉球の舊都首里に行くと首里城の前に大きな門があつて「守禮之邦」と書いた額がかけてある、がこれは虚でない琉球は實に守禮の邦と云つても誇言ではありません宗教は餘り盛でなかつたに拘らず道德禮儀は昔から堅固であつたことは實に珍らしい。殊に女子の德義と來ては恐らくは他に多くあるまいと思はれる程です。現今女學生墮落の聲が各地に喧びすしいのに獨り琉球の天地に此聲を聞かないのは誇りとする値があると思ひます。

琉球には毒蛇が居りますが到る處に居ると云ふ譯ではない。山中か或は岩穴に時々見えるのですが、宮古八重

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

山には毒蛇は居りません。それについて面白いのは本島には毒蛇あつて人を咬み宮古には普通の蛇が居つて人を巻き八重山のものは尾で刺しますがこれに本島は龍の頭に宮古は胴に八重山は尾に譬へられたからだと申して居ります。

　結婚の沿革は大昔は郡婚雜婚行はれて夫婦の起原が出來た樣に思はれる、それから今日の結納があるを見るとやはり賣買結婚も行はれたものと見える。或地方では夜花嫁を連れて花婿の家に行く時は多數の男が提灯や杖を持つて護衛して行く處がある。あの杖は掠奪した花嫁を他人から掠られぬ爲めの防禦用で確かに掠奪結婚の遺物である。越後邊でも嫁祝いと云つて冬ならば雪を固め嫁を目かけて打ちつける處があると云ふ或は結婚の曉に石を投げる處もあるそうだが、それは皆此の掠奪者を追いかけた名殘であると思ふ。琉球の結婚の沿革は斯くの如きものでありますが今日では他と大した差はない樣てす唯だ儀式が多少異なるに過ぎない。

　源爲朝が琉球へ來たと云ふことは種々の書畫等にも載せてあります『保元の亂に爲朝は伊豆の大島に謫せられ二條天皇の萬永元年に大島から琉球に向ふ途中暴風に遭ひ船將に覆らんとする時舟子畏れてなす所を知らず爲朝叱して曰く「運は天にあり何ぞ恐るゝに足らん」と既にして一港に着く之れを運天港と名づく（本島の北部今歸仁村にあり）其の後大里按司の妹を娶り六條天皇の仁安元年男子を生むこれ即ち舜天にして藩主の祖先なり』と書いてある。

浦添間切に牧港と云ふ港がある此處は爲朝が琉球を去るとき歸帆を揚げた處と云つて居る其の後妻が爲朝を慕つて數月の間この附近の洞穴に住ひ夫の再來を待つたから昔は此の港を御待港と云つたそうて此の洞穴は今も存して參拜するものがあります。

　琉球の言語は支那と本州語との混同した一種のものだとか或は其の語系は支那の系統に屬するもの等と云ふ人がありますがそれは誤謬の甚だしきものです。琉球語は純然たる本州語の系統に屬するものと云つてよ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

い。唯だ本土との交通が今日の様に頻繁でなかつた爲め多少轉訛と土語とが生じたに過ぎないそれだから今日の琉球語には本州の古語が幾らも殘つて居る。例令へば

居りません、を「オヤビラン」(居り待らねの轉)、妻を「トジ」、肉を「シシ」、地震を「ナイ」、女を「ヰナグ」(オナゴの轉)、去年を「コゾ」、と云ふが如く其他澤山あります先づ琉球の話はこれ位にして置きましよう。お尋があればまたいくらも申上げます。　(完)

さまよへる聖者（承前四）

ヴァンダイク作

櫻　喬　生　譯

三

あはれ、異郷他山の旅路にさまよへる聖者が行方や如何ならむと眸を凝らして打守れば、折しも我が夢殿の燈火は俄かに消えて四邊は唯黒暗々たる霧の裡に霞めり。見渡せば砂塵萬里雲煙模糊たるの間、果しも知らぬ砂漠の荒野を駱駝の脊上悠々として浪路を分くる小舟の如く其が歩みの足を進め行くは、之ぞ正しくアルテーバンが勇ましき面影とは知られたれ。

死の境涯は普く彼が身邊四周を閉ち込めて殘忍の網を擴げたらん如く、砂礫の大地は荊棘所在に散亂して見渡す限り一樹の木の實だになし。岩礁は此處に彼處に突起して宛然妖魔の白骨かと疑はれ、草なく木なき陰鬱の山系は眼前低う馳りて古びたる水なき河床其が間を縫ひ、見るも心地あしき砂塵の山は、恰かも人間墳墓の標とも覺えて力なく地平線上に横はれり。炎々たる日の光りは砂上を焦して大氣も爲に燃えむとし、生物は喘々焉として大地を歩するに慵く、微小の飛鬼は紅に染みたる荊棘の間を馳走し無數の蜥蜴は急速岩上の一端に隱る。之を外にして廣き沙漠の野路は一物として人の眼を樂しましむる者もなし。

さはれ夜の幕一度下るや、豺の吠聲仄かに暗路を破りて獅子の餌食を求むる反響と呼應するが如く慄く耳

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

りの冷氣は日中高度の炎熱を一夜の夢かと疑はしむ。あゝ此の寒熱極度の魔境を犯して我等が敬虔なる一マギー教徒アルテーバンは、今しも駱駝の足音靜やかに一意行手を急がせつゝある也。

さるにても美しきダマスカスの花園は淸らに馳するアバナ、ファルバの流れに濕され、岸邊には沒藥薔薇の香りゆかしく、紅綠の百花春を競ふてあたりには一面に凉しき芝生の綠氈を布きつめたり。見上ればヘルモンの高峰白雪深く、鬱乎と茂る杉の木立、ヨルダンの聖き谿間、淸澄氷の如きガリラアの湖畔、エスドラエロンの果しなき沃野、さてはユフレムの山々ユダの臺地など手に取る如く打詠められぬ。

かくて炎熱の下砂塵を蹴て、果しなきデザルトの荒野を横ぎりしアルテーバンは、無事に長途の旅を終えて樂しきベツレヘムの樹影に入りたるらし。時は恰も彼の東方の三聖者達が此の地を見舞ふてマリアとヨセフの家を訪ひ、神の子イエスを拜して黃金乳香沒藥の數々を脚下に捧げしより數ふれば三日を過ぎし後なりけり。

さるからに、さまよへる我が一聖者は、主に捧ぐべき紅玉眞珠の寶物を懷いて遙々山を越へ谷を渡り、砂漠の荒野を横斷して足は疲れ氣は弱りしも、一點希望の光り赫炳として尙ほ雲水遠き彼が行手を照らしぬ。彼は獨りや呟きぬ。

『おゝ、例令我れ三人の友に後れて孤身此處に辿り着きしと雖も、今に主を拜するの歡喜は來らむ。おゝ此の地こそ彼の一病子が豫言せられしと告げたるベツレヘムの村里なれ、然り此の地こそ我が一大光彩の閃くとみし靈地なれ。さるにても大星我等を指示し給ひし妙なる軒端や何處なるらむ!?』

とみれば村の道邊は荒れ果てゝ家には人の氣合も稀也。彼は必定群羊を追ふて牧場に出てし村家の常と心窃かに首肯きしが、俄然何處ともなき小家の一隅、仄かにも婦人呻吟の聲は響きぬ。彼は怪しみ且つ懷かしみつゝ聲をしるべに軒端に立てば、戶閉りなき一室幼兒を抱ける年若き一婦人を認めぬ。婦は靜やかに身を起

して、過ぎつける日此の村に東方遥かなる地より三人の聖者現はれ、星光常に彼等を守り導きつ、今し幼兒の生れたるナザレのヨセフが許を訪ねきて尊ぎ寶の數々を捧げしことなど細やかに物語りつゝ偖言葉を續きて、

「やがて此の三人の聖者は再び瓢乎として其が影を潜めぬ。我等は東方遥かに此の地を見舞い給いしことだにも心に奇しと思へるを、今また音もなく其の姿を隱せることとの怪しうも打驚かされて、たやすくは其が深き意味を汲み取り得ざりき。かくてヨセフは母子を携へ其の夜の中に人知れずナザレの村を出てゝ埃及に旅出せりとの噂とりぐ\なるも、其の後此の地には一種の呪咀ありて災厄今にも降り下らんといひ、或はローマの軍勢我等が膏血を絞りても貫を集めんとてエルサレムを出發せりなど噂せられて人心競々、村人等は先つ頃より小山の間に日頃愛養せる禽鶏群羊を運て貪欲飽くなき彼等が毒手を遁れたるなれ」

アルテーバンは此あはれなる物語の一伍一什を聞きとりつ、ふと嬰兒の方へと目をやれば、何心なく我が姿を覗きみて完爾と洩らす微笑の美しさ！　やがて兒は其が紅葉なす兩手を擴げて、胸邊黄金色の輪を描ける妙なる靈雲を攫まむとするものゝ如し。聖者は俄かに湧き起る胸裡の温みを感じつ、幾多の疑懼恐怖の念と戰ひつゝ唯一意仄かなる光影を打仰ぎて廣漠長途の旅路を重ねし彼が身には、すゞろに愛と眞との賜を得たらん如く、胸中の鬱氣旅路の疲勞此の刹那何處ともなく消え失せしを覺えぬ。

耐へ兼ねし彼は靜かに幼兒、幼兒の頬を撫でつ、

「おゝ此の清らなる幼兒、罪なく穢れなき愛らしの幼兒、何故御身は我が求むる主にはおはさぬぞ!?　さるにても、主なる王は倘賤しき家に生れ給へるにか。あゝ果しなき天なる星光の御惠みはいぶせき小屋の垣根よりも立上るものを、おゝ全知にして全能なる御神よ、我が此の望み此の憧憬、是をしも時のまに達せしめ給はんにはあまりに事もなき細事

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とはよも思召し給はざらん。我れ數日の前に此地に來りしならんには、貴き主の御姿を眼前に拜するを得たりしならんものを、おゝ今や我は再び去て埃及に主を求めざるべからず。」

若き母は靜かに愛兒を搖籃の中に運び、見慣れぬ人の此の家を訪ね給ふも神の惠める奇しの縁、心ばかりの饗應せんと、やをら座を起つて勝手の方へと姿を隱しぬ。やがて食卓は都門の珍こそなけれ、心盡しの素單なる料理をもてかざられぬ。彼は思はず肉身の鋭氣を恢復すると同時に心も自つと新鋭の氣力を得て心より婦人の誠を賞味したり。時しも幼兒は靜けき眠りに入りて夢路は清き谷の小川、平和の色もおのづと顏面に溢れて室は温かなる春風の駘蕩たるものありき。

俄然村外れの一角荒々しき喊聲起りて旗鼓の響き刀槍の音凄ましう、婦女子は聲張り上げて泣き叫びつ、

「おゝ軍勢！いくさ人!! ヘロデ王の兵士は吾等が愛兒を刃にかくるよ!!!

年若き母は物音聞くより顏色蒼醒めてヒッシと幼兒を抱きしめつゝもしや幼兒にして目醒むるよのあらんには必然聲打ちあげんと氣遣ひつゝ、上衣の袖もて輕く幼兒の顏を蔽ひ、室の一隅小暗き所に遁け潜みぬ。

アルテーバンは急ぎ室を出て乾然として軒端に立ちぬ。爛々たる眼は四邊を壓して物凄く、廣き肩は門戶の兩端を埋めて白帽の尖端は殆んど楯に觸れん斗り。

兎角の中にヘロデ王が軍勢猛虎の如く血潮に滴る刀を提げ街道を急ぎ來りぬ。然も此の一種異樣の裝せる一聖者が姿に接しては、さしもの兵等も暫しが程は如何はせんと躊躇ぬ。やがて隊の長とも覺ゆる一丈夫、つか〳〵と進み來りて、急ぎ此處を立退くべきを命せしが彼は顏容自若、恰かも蒼穹の星光を仰げるが如く毅然として動かさること大山の如し。眼底一脈の焔燃えて豺豹慓き、血拘も其が歩みの足を止むるかと疑はれぬ。彼は默然として暫しは隊長を打守りしが、やがて低音をもて、

「我は先つ程より唯一人此處にありて、御身等の中

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

最も寛厚にして事もなく此處を見遁すべき人に向て、之なる寶石を與へむと待ち焦れ居たりき」

アルテーバンはやをら紅玉を懐中に求めて掌上に上せぬ。おゝ其の如何に輝かしきぞ。咽々たる光彩は一點深紅の血潮かと覺えて身も心も眩まんばかり。

隊の長は一目之を見るや、心骨溶けて微笑みつ、眼の色は唯一意慾求の色に滿ちて喝仰の氣は厚き口邊を震はしぬ、彼は覺えず手を伸ばして美しき紅玉を摘みながら早急部下を顧み、

「進軍々々。此家には一人の兒なし。進め！進め!!」

旗鼓の響き人馬の音、いつしか村落の彼方鎭守の森邊に消え行けば、あたりは大風後の慘況を呈して前にもましたる寂寥悲哀の氣に滿ちぬ。例ふれば之れ慄く小鹿の隱場に近う一隊の獵夫山路を急くにも例へつべきか。アルテーバンは靜かに室に歸り、跪座東方を拜して切なる心の祈りを上けぬ。

「おゝ眞と愛との中にまします天なる神よ。希くは我が罪を許し玉へ、我れは只一念幼兒の生命を救はんが爲に心にもなき虚僞を働きぬ。あはれ我が寶玉の中、二個の玉は既に我が手中を離れ、神に捧ぐべき我が誠の玉はいふにもたらぬ人事の爲に費され了りぬ、おゝさるにても我は尙ほ主なる王の御前に跪くの恩寵に與り得べきか……」

尙も小暗き隱れ場所を離れ得ず驚きと恐れとにおのゝき居たる年若き母は、此の時しも嬉し涙にかきくれて低聲もて感謝の辭を返しぬ。

「おゝ御身こそは我が愛兒の救ひ主、我等母子の恩人なれ。神は必ず御身に近く出現ましまして行末永く恩寵を垂れ給ふべし。おゝ天にまします御神は必ずや妙なる御顏を示して御身に限りなき平和と祝福とを下し給ふなるべし!!」

妙なる我が夢の御殿は前にも倍したる靜寂の氣に滿ちて闇暗たる神秘の霞は深く四邊を閉ち込めたり。さはれ歳月の箭は駸々として寂寥の暗路を辿りけると覺

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し、敬虔なるアルテーバンが生命の光は濃霧の中見えつ隠れつ、朧ろにかすむ我が眼界に一脈の光影を與へぬ。

アルテーバンは今し往來も繁き埃及の市を逍遙ひぬ。彼が胸中には唯一意ベツレヘムより難を遁れし一家の後を追ひ求めつゝ、時にヒリオポリスの無花果の木蔭を辿り、或はナイル河邊新バビロンなる城壁の下を過りつ——磯打つ波の寄る〳〵に果しなき足跡を追ふて埃及の天地を隈なく尋ねありきぬ。

彼は亦人の世の榮光を誇り、不朽不滅なる人子の希望を秘めて夕陽輝く天の一方、深紅の雲間に巍然たる尖端を見せたる三角塔のほとりに其か憧憬の旅路を續けぬ。時に半身を見せたるスフキンクスに瞳を轉しつ、其が靜かなる眼球、微笑む如き口邊の意味を讀まむとするもの丶如くなりしが、其は甲斐なきうたかたの望みなりき。あはれ全身の努力、彼が神來興感の一念はチグレーンが云ひけん如く、あだなる空賴みにて永却不斷の謎には非ざりしか。おゝ此の憐れなる旅路に於て唯一念憐憫の御記號と妙なる微笑との中一點神の鼓舞激勵のなからざらむや。あゝ敗れたるものも勝利の刹那を喜び、惱めるものは望みを得、無知は賢者となり盲は明を得て、さまよへる者も遂には天なる御國に達すべき默示の確然として之ありしには非ずやととみれば妙なる我が夢殿にはナイル河口の大都會、歷山王が其昔固き基礎を横えしといふアレキサンドリアの市の外廓を示して朦朧たる一家の中へプリユーの一高僧と商議せる彼が姿を現し出しぬ。敬虔なる件の高僧はイスラエルの豫言の一卷打ち披け、メシアの災厄を豫告せる熱烈の文字を聲高に讀み上けぬ、おゝ人に棄てられさげすまれ、悲しみ惱みの友たる救世主!

やがて高僧はアルテーバンの顏を凝視しながら口を開きぬ。

「見よ、御身が求むる人子の王は嘗て深殿玉樓、權門豪家の中に見出さるべうも非ず。よしや此の世の光り、イスラエルの光榮にして地上人權の偉力と共に降下せらるべきものならば、其は慥かに古き昔に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

於て示現せられたるに相違なし。何となれば苟もアブラハムの子たらむ者、彼のヨセフが埃及の宮殿に於て握りたる威力、乃至はソロモン大王が豪奢の極みを盡して彼のエルサレム諸王の間に帝座に上りし權威の夢と到底匹敵すべうも覺えず。さはれ世の人の待ち焦れつゝあるものは赫炳たる一朶の新曙光なり。忍肉と苦痛の勝利とよりして輝き出る榮光の一閃也。おゝ永遠無窮に亘りて固き基礎の上に建設せらるべき者は、是れ新しき神の王國。固き美しき愛の御園に非ずや!

さはれ此の豫言なるものが如何に移動し行くべきか。又亂れし諸王此の世の人子が、如何にしてメシアの降誕を信じ彼に向て崇敬臣事の禮をとるに至りしかは吾等が理解に苦しむ所、然も吾れ確言せむ、彼を求め拜せんとせば須く貧者と賤しき者、悲しめる者壓抑に泣ける者、此等可憐の人々の中を歷訪して委細に尋ね見舞はざるべからず」

此に於てアルテーバンは父子離別に泣ける人々の中に主を尋ね、求めつゝ此處より彼處へとさまよひ歩きぬ。蓋し是れベツレヘムより難を遁れたる一家三人の母子が此の賤民の中に恐らく隱れ家を求めしにあらずやと思はれたれば也。彼は飢饉に苦しめる國々、乃至は食を求めて號叫せる貧者の家を訪ね、賴りなき災厄の苦痛に惱みて呻吟の聲高き疫病の都市を見舞ひつ、或は地下牢獄の暗黑界に厭抑の苦しみ呻吟の聲絕えざる薄運の男女を慰め、奴隸の市場に引かれたる可憐の遊子或は又帆船に雜役を取れる憐れの人々を見舞ひぬ。

斯くて悲苦の雲深き町々村里を經巡りしが、尋ね求むる人はあらで只救助せらるべき貧兒の多きに打驚かされぬ。彼は至る所此等の貧兒を恤み、病める人を起し囚はれし人々を慰めつゝ果しなき旅路を續けしが星霜徒らに遷り行きて數十の年月は此の間織女の梭と往來して、いたくも地上齡の年月を重ねぬ。

彼はやがて初一念を打ち忘れたらん如くみへしが、一朝晨の色鮮かに曙光輝くローマ獄囚の門前に、忽然

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

として其が姿を現はしぬ。彼は除ろに最後の寶たる眞珠の御玉を懷中深く取り出しつ、陸離たる光輝、虹色かとまがう審美の艶、淡青に薔薇色なせる新衣の光彩は其が表に波打渡るかと疑はれて、既に手中を離れし青玉紅玉の色艶をも唯一身に集めしかと思はれぬ。斯くて尊き此の聖者が初一念は、過ぎにし喜悦と悲苦の記憶と共に深くも個中に刻み付けられて、今も尙ほ彼が胸にあり〳〵と感知せられぬ。あはれ彼が唯一念思ひつめたる願望を育み障碍の手綱を擴げし草々の悲喜は、今や其が本質たる衷心の中一種美妙の魔術となりて移植せられぬ。斯くて年立ち星遷り陸離たる光彩は一段の美しさを增して、胸打つ呼動も亦一倍の温情を添へたりとぞ覺へし。

あはれ彼れアルタバンが最後と賴む一個麗はしき眞珠の御玉！　おゝ其が行方や如何なりし!?　我れは一念之を思ひ憂ひつゝ、現ともなく夢路を辿れば我が奇し妙なる夢の御殿は、暗黑の裡一點の光を點して、いつしか其が行方のさまをば現じたり。

いざや友人、我は次の一章に於て、眞珠の行方と諸共にさまよへる一聖者が身の落ち行き其が最後の歸趣をば物語らなむ。　（次號にて完結）

女子青年會記事

⦿會員諸姉に申上候

本會事務整理上雜誌郵送上甚だ困難を感じ候間會員諸姉及雜誌購讀の方々に於て若し御轉居御移動の節は必ず新御宿所御一報被下度奉懇願候　以上

麴町區土手三番町十五番地
日本基督教女子青年會

⦿學生特志外國傳道會聯合大會

一月二日より七日迄
英國リバプール市に開かれたる

右の大會に出席致せし模樣を左に取り摘んで御報申上候委敷は其内大會の報告を得て御送り申上る積りに御座候、

昨年四月東京市に於て催されし萬國青年會大會に出

席せられしサンダー孃より外國の代表者として此大會へ出席叶ひまじくやとの御招待を受け候間京都同志社女學校を代表して參り申候、服裝は和服に袴を穿けて參り候間開會の始め外國の代表者紹介の節一層の拍手を受け各新聞にまで記載されしとの事後にて承はり申候。

大會は一月二日より七日迄新年の初旬を期して歐洲より米國へ渡る航路之關門たるリバプール市に於て開かれ申候、リバプール大學教授、學生諸氏は素より申すに及ばず監督、技師諸氏其他青年會の會員諸氏の親切なる盡力は外國代表者一同の深く感謝致せし處に御座候、

リバプール市長も滿空の喜びを以て歡迎せられ、一夕代表者一同を市會議事堂に招待して茶話の饗應と奏樂の餘興有之候。

主もなる集會は市の大公會堂二千六百人を容れ得るフイラーモニックホールに於て催され午前の集會にも夕刻の演説會にも殆んと滿場の聽衆に有之候。二日の午後七時に開會式執行、リバプール監督、リバプール各教會の總代及びリバプール大學副校長等の歡迎の辭に次て英國學生基督教同盟會總幹事の答辭あり次に司會者の開會の辭を終りて、リバプール監督の熱心なる一場の演説有之候て閉會は九時過ぎに相成申候、一月五日日曜日を除くの外大會中の四日間は午前九時十五分より三十分間の祈禱會青年會館にて催され候ひしも外國婦人の代表者四十餘名は別に女子青年會館の讀書室に此會を開き各々自國の言語にて熱心なる祈禱を捧げ申候、次て午前十時大公會堂に於て講演會開會、讃美祈禱を以て始まり大抵二名の演説者あり後十分間も默禱を以て一段落を告げ休憩十分間は十五分にして、十一時四十分再び讃美、祈禱によりて第二の講演あり是れ亦た大抵二名にて午後一時に全く午前の集會を閉ぢ申候。午後七時に再び此大公會堂にて演説有之何時も三名の辯士演壇に立たれ二時間の長き集會も短き心地致し候、右は主なる代表者學生一般に對しての集會に候へども午後三時の集會は東洋各國或は南阿の傳道事

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

業及敎育事業に關する講演にして各所即りバプール大學講堂青年會講堂、其他二三の公會堂に於て別々に開かれ學生は其一を撰んで自由に出席いたすの便利を與へられ候、外國代表者のみの報告會も午後に於て二回開かれ候、

五日の日曜日は休會に候へば靜肅に有益なる安息日を守もられたしとの大會司會者の注意有之代表者は午前各自に市中の敎會にて禮拜に列なり、午後は別に二日間に得たる處を靜かに熟考反省し且つは正會に親交を結ぶ爲めに主客膝を交へて暖爐の傍に暖かなる談話を交はし眞の安息を得申候。

此大會へ出席の代表者は外國大學生百五十餘名、本國(英國)大學生總數千四百餘名と聞き及び候其他學生間の敎導に從事せらるゝ有意の人々も亦た少からず御座候、今代表者の國名を記憶に存ずるものゝみ記し候て本國、獨逸、佛蘭西、和蘭、瑞西、白義、瑞典、諾威、丁株、フインランド、露西亞、米國、印度、支那、ニユジーランド、等にして我東京の青年會主事山本邦之助氏も日本を代表して出席せられ候。氏は米國青年會の大會にも列し次て當大會に出席せられしとの御話し承はり候。

此等の學生は各種の學科を修めつゝある人々にして醫科生あり、文科生あり、理科生あり農科生あり、法科生あり、神學生もありて種々雜多に候へども皆等しく一の神を信じ基督の僕となりて仕へん事を期し此道の爲めに聯合して聖書の研究に熱心し且つ進んで學生間若くは外國に基督の敎を奬勵する人々に御座候。

昨年萬國青年會の大會には不幸にして出席し得不申ざりし故比較して申上る事は出來不申候得共準備の整頓して注意の行き届きたるには實に感心いたし候彼の大會の案内書(ハンドブツク)と此大會の案内書(ハンドブツク)とを比べ見るにプログラムの如きは始めより能く秩序立つて、之を手にいたせしは大會二週間以前に候ひしが、何日の何時には何の集會にて何辯士の講演を聽たかを定め置くことを得其場に臨んて、間合する如き不都合なく、未曾有の大會も混雜なく、よく油を指したる機械の如く進行いたし候。

其他代表者の便を渡りて鐵道の割引、飲食店の案内、筆書室の準備其他些細の注意は我國のものと大同小異にして殊に靜かなる祈禱を要する人の爲に會場に近き二ヶ所の敎會堂を開きて大會中便利を與へられたるは流石に靈性上修養に重きを置かれたる集會と存候。

素より此大會は我國傳道に關してのものに候へば演說者は英國敎會の監督、牧師、青年會々長、幹事及び大學敎授等にして演說は南米南阿、印度、支那、日本の傳道事業及敎育事業に關したるもののみに候、モット氏の「極東の勃興」なる演說は尤も適切に公平なる批評と存候、演說の內容は後日御送り申上候間、大會報告にて御承知被下度候、

此大會の如何に成功せしかは凡ての代表者が一種云ひ難き靈の力を得て散會いたせし事にてお察し下され度候、扨て萬國的大會も追々頻繁に日本にても催さるゝ樣に相成可申否な催されん事を希望いたし候、昨年青年會に出席せられし諸氏之間には日本之眞の事情があまり間違ひて紹介され居候樣覺え候。此等諸氏の話とモット氏の演說にて聽衆に日本現今發達の有樣を幾分紹介せらしと存候へども一般外國人の間には少數を除くの外は日本に付ての知識は誠に少なく御座候、是れ日本を本當に紹介し得る英語之出版物の少なき故にもやと存候遠からざる內に尙一度青年會或は學生基督信徒之大會之如き萬國的大會を日本にて引受る事を得候へば如何に幸ひなるべきかと存候、種々の點に於て互ひに卑益する處多く殊に萬國民皆な同じ神を信じ同じ聖書を硏究し同じ心を以て祈る、肉體上に於てこそ人種の區別あれ、神の前には等しく同胞なる一致平和之觀念を愈々施することを得られ候と存候

皆樣も定めて御感じの事と存候萬國的大會に出席するには英語之外に獨語か佛語の力を要し候と熟々感じ申候、外國代表者報告會にて大抵英獨佛の三語を解せらるゝ人々のみに候へども會ま英語自由ならざる人有之獨語或は佛語にて報告せられしが會集者中十中八九迄之を解せし故時間節約の爲め英譯せられず私の如きは實に不自由を覺え申候、財政之許す限りは獨佛の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

二語をも外國語教授に加ふるの必要少からずと存候、
大會中は厳粛なる集會のみを以て満され候へども各國の代表者が互ひに團欒の閑話をいたせしは晝飯の食卓に向ひし時に候百五十餘名の各國代表者と本國接待掛員と一同フィラーモニックホール階上の廣間に備へられたる食堂にて西洋人も東洋人も隔てなく臂を交へて席を占め片言英語をあやつりて愉快なる會食中卓上演說も亦た盛んに青年の氣慨揚て世界小さしと覺ゆる程にて頓がて特志者の唱歌、中にもフィンランド代表者男女四名の學生の歌は尤も歡迎せられ候、

外國婦人の代表者は總數四十餘名其内數名の教導者を除くの外は皆大學の女學生にして和蘭、獨逸、丁抹、瑞典、諾威、フィンランド、米國等にて婦人のみの報告會も一回開かれ申候、其報告によれば各學校にて各自學生間に聖書研究倶樂部を組織し研究の方法に就ても種々心膽を懲され居候樣子を窺ひ申候、何れも聖書研究會には同じ樣なる困難あると見えて如何にせば面白く研究を爲し得るかなどの問題を出せし人も有之候ひしが十中七八までは參考書(テキストブック)を用ひられし樣子に御座候或は註解を用ひ、又は只聖書を一節々々に問答體に解き明かす仕組の處も無之候よし何れも大同小異に御座候、是れに就ては教導者の密かなる祈禱の生涯が尤も大切と存候

私が尤も感心いたせしは研究法よりも女學生の態度に御座候實に活潑に候へども眞面目にして謙遜少しも生意氣なる態度なく是れ一は基督の信徒たると一は學問の修養深きによるものならんと心から尊敬の念を抱き申候、代表者の宿はリプバール女子青年會の寄宿舍を以て當てられ數名の本國婦人外國婦人同宿して接待の勞を取られ候ひしが親切行届きて皆々自家にあるの思ひをいたし候、皆樣も御存じのウラス孃及び和蘭婦人バー、ダ、ラ、フエーユ孃も御同宿にて親しく御温容に接しサンダー孃は宿は異なり候ひしも度々御來舍成しまたひし故親しく御話し申上候、

草々御報申上る筈に候ひしも種々事の爲めに妨げられ後ればせに相成候へども右所感を交へて大會の模樣

大略御報告申上候　早々

牛田多記

日本青年會諸姉
同志社女學校青年會諸姉御中

●ヘレングール孃より津田梅子女史に送られたる手翰

第一信

拜啓

妾はグレース、ドッチ孃より御身が親しく此地を來訪せられしとの報に接して深く喜べるものに候、願くは來週土曜日の午前第四十三番街レキジントンアヴェニユーの停車場より九時四十五分發の滊車にてアーウキントンに御出被下度、さすれば停車場迄は馬車にて御迎へ申上げ直様我が家とは小山一ッを隔てゝ同じ屋敷內に建てられたる裁縫女學校へと御案內可致候。御身は必ず此の校舍乃至は生徒授業の有樣を一見して多少の興感を浮べ給ふことゝ信じ申候。若し御身にして他に要務だに無之ば午後一時共々小蒸汽をホドソン河上に浮べて暫しの淸遊を試み御身が二時三十六分の汽車にて御歸館の時刻を逸せざるやう取計らひ可申今より指折り數へて樂しみ居り申候。希くば會見の日の一日も近からむことを、

一千九百七年九月十日

ヘレンミラーグール

第二信

謹啓

リンドホルストに於ける唯暫らくの會合は妾の今に愉快として忘れ能はざる所、さしも心樂しく結ほれし友愛の思情なれば、いつかは再び温むるの日あるを信ずるものに候、

妾は在ブルークリンなる彼の年若き一婦人は勿論御身の紹介だにあらば、御身の薫陶を受けたる生徒諸孃と何時にても喜て會見可致候。

妾は又十二月早々彼の地に轉地致す心組に付き彼の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

婦人及び良人の君にも親しく面語するの機あるを深く喜び居候。

希くば御身の學舍に於て日々螢雪の業にたづさはり給へる懐かしゆかしの姉君達へ、妾が微意何卒宜敷御傳聲被下度、御身の學舍に學ぶことに於て多數の生徒諸姉は甚大なる幸福を得られつゝあることを深く確信致居候。何卒生徒諸孃が楽しき學舍に於て修め得たる學術を以て社會一般の爲十分御粹盡下さるやう呉々も祈上申候。おゝ此等年少氣鋭なる婦人達が其が生涯の足跡を深く社會生活の上に印するの時、如何に妙なる麗しの感化と餘香とを匂はするものなるか御身は思を此に馳せ給ひしことありや。郁乎たる花紛、赫炳たる五彩の御光りは常に其が身邊四周を飾りて優に婦人が社會人類の花たるに背かざるもののあるを喜ぶものに候。然して此の事實は僅かに御校出身のあらゆる學生諸孃が當然發揮せらるべきものなるを思ふて彌增し歡喜の情おさえ難う候。願くは此等美なる學生諸孃がキリスト教信者にして基督及其の御教へが如何に婦人の地位品格を高上する上に於て勉められたるかを事實の上に履行せられたく切望致し候。

倘ほ先便中書き送り給へる御厚意の數々深く御禮申上候。されど妾は最も凡庸なる一個の婦人に候。希くは餘りに妾を理想化し給はざらむことを祈上申候

かしこ

再度の逢瀬を切に祈り望みつゝ誠實誠意の友なる

ヘレン、ミラーグール。

一千九百七年九月十七日

●共立女學校靑年會よりの來翰

とやかくといふまにはやきびしき寒さとけてゆたけき春のこゝろに相なり候。さながらの景色そのやうさぞかし長閑にもある天のみめぐみのもとにおはしますらむと蔭ながらことほぎ參らせ居り候。

さて過ぐる日第二期の選擧をはり候まゝ別紙にしるせるを御送附申上候まゝ何卒御一覽被下度候。また今

日は青年會機關雜誌「明治の女子」三部御送り下されまことに難有く御禮申上參らせ候。
只今までつひ御尋ね申上げまゐらせざりしが中央本部へは毎月或は毎年幾何か定めて義務金やうのもの御送りせても宜しう候にや。誠に御手數恐れ入り候へ共紙上にてか御答へ下され候はゞ嬉しう存じまゐらせ候。

先は右御尋ねまで　かしこ

三月二十四日

共立女學校青年會

日本基督教女子青年會御中

●共立女學校青年會報告

明治四十一年三月十九日午後三時三十分より事務執行委員の選擧あり、投票の結果左の如し

會長　飯田琴子

會計　大石俊子

書記　吉田道子

傳道部…	委員長	大石竹子
	書記	代田初子
	會計	伊藤通枝
矯風部…	委員長	小澤久子
	書記	松岡敬子
	會計	橋本美代子
祈禱會部…	委員長	中島和佐子
	書記	高橋榮子
	會計	原田芳子
慈善部…	委員長	幸田米子
	書記	佐藤惇子
	會計	二宮朝子
文學部…	委員長	山口直子
	書記	谷口房子
	會計	伏屋繼子

●田口氏よりの報告

三月には役員の任期終り又會長山田、會計石川兩姉卒業のため新役員一同三月二十七日午前九時より送別會を開く。出席者十一名なり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

初めに新會長の挨拶、次に兩姉よりの謝辭あり、其後直ちに會の事に付き兩姉より種々の懇切なる注意あり、散會後新役員のみ相集り一年間の働に付種々談議の末次の條々を議決す。

第一聖書研究會、五種の會を設く。

イ、使徒行傳の組、毎週一回

ロ、キリスト傳の組、毎週一回

ハ、靈活の組、毎週一回

ニ、特に未信者のための組、毎月一回

ホ、役員受持の組、毎週一回

第二、祈禱會

イ、會員一同の祈禱會、毎月第四水曜日

ロ、役員のみの祈禱會、毎週月曜日

第三、此外種々の會の働に各一人の主任を立て其下に會員全體を働の種類に從ひて分ち勵せしめ會員一同の活動を計らんと決せり、其働の報告會を毎月一回開會すること

二月十七日、役員改撰、其結果左の如し

會長、植村澄江

副、小林壽

會計、奥山ます

望月けい

書記、山下とめ

林あき

事務員

誘導員、望月よね

愛波せん

通信員、田口きよ

圖書係、加藤たや

準備員、粕川あや

井上すゞ

繽紛録

◉讀者諸姉は別項リバープール大會に於ける牛田たき子孃の報告を一讀せられたるなるべし。孃は同志者女

學校出身の才媛にして現に英國スツッドレー大學に於て園藝學の研讃に一身を委ねられつゝあり。別記報告落手後（記者は雜誌締切後落手したれば三月號に掲載する能はざりしを深く遺憾とす）聞く所に依れば半田孃は大會終結後、大學に還り非常なる熱誠を以て女子青年會の爲の粹盡せられしと云ふ。從來スツッドレー大學に於ては一の確然たる基督教團體たるもの存立せざりしが孃は一教師の輔助を得て確固たる聖書研究の一クラスを創立せられたり。其の會員は二名の亞米利加人と、一名の獨乙婦人、二名の英國人及び一名の日本人と例の教師とを合せて七名なれば其の會合の愉快なるは云ふ迄も無きことならむ。然も吾等は英國大學に於ける此の貴き事業が一日本人の力に依て創起せられたるを思ふて衷心歡喜の情に耐えざる者也。

◉別項掲載せるが如く津田梅子女史に送られたるグール孃の手簡は孃が如何に日本の學生を歡迎せられつゝあるかを想像するの好資料たるべし。此の頃孃は紐育及び其の附近に在住せる東洋の學生に向て月々の會合（自宅に於て開かるゝ）に出席せらるゝやう特に懇切なる招待狀を發せられたりといふ。會合には必ず二三子の演說あるを常とす。此の程の會合に於ては東京女子英學塾出身の岡本孃日本學生に關する一場の談話を試みられたり。

◉上述の如き目的を以て日本基督教青年會は目下遠く歐米諸國に留學せる日本女子學生の尊名を喝仰しつゝあり。此等人々の通信並に投稿は喜て本誌に掲載し紹介すべければ希くは麴町土手三番町青年會本部宛にて玉稿御寄與被下たし。

◉本年に至る迄獨逸國內に於ては別に婦人の爲に設けらたる基督教の團體なるものはあらざりき。されど本年パー、デ、ラ、フエーユ孃基督教學生事業の爲め諸大學を巡視せられつゝあり。フエーユ孃の名は恐そらく昨年開催せられたる萬國青年大會參列者の一員として讀者諸孃の記臆に新たなるものなりと信ず。孃は又ジーザス、クライストに於て新たに開拓せられたる信仰を以て日本女子學生に關する有益なる記

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

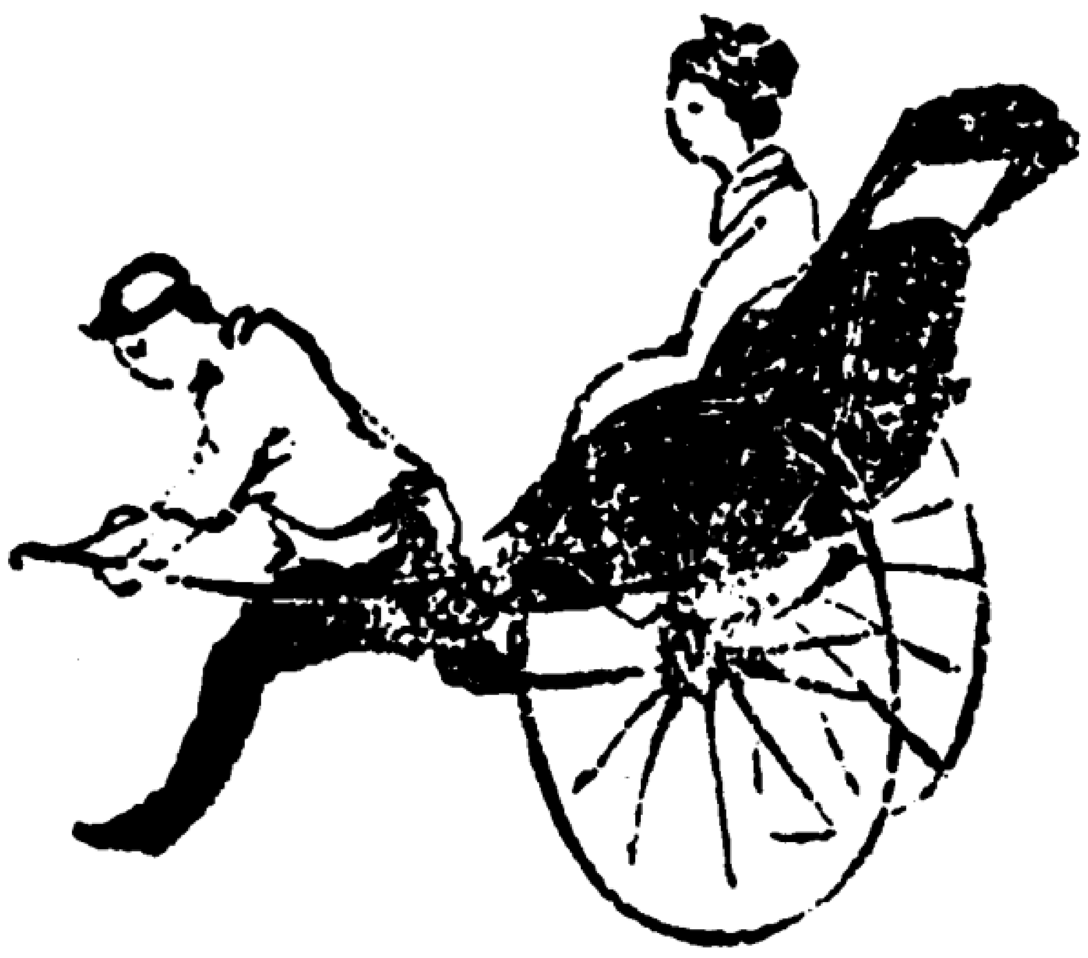
逃を試みられぬ。

◉英國學生基督敎同盟會幹事たるルーズ孃は此の冬を魯國女學生間の傳導事業に過し目下墺太利に滯留し七八月頃迄は同じく神の王國建設の爲に盡力せらるべし。蓋し歐大陸に於ける大學及び諸種の學校を巡りて基督敎事に於ける大業の爲に粹盡せられしは女史を以て嚆矢とす。女史は亦祈の中にも特に日本に於ける基督敎女子靑年會の名前は强大なる記臆と印象とを殘しつゝありとの書狀を寄せられたり。

◉東京日本基督敎女子靑年會は寄宿舍委員長として有力なる新渡戶夫人の無事歸朝せられしとの報に接して衷心祝賀の意を表す。

◉新紙は俄然蘇格蘭のオーバルトン卿の逝去を報せり。卿は平素日本學生の前途に向て深き誠意と同情とを寄せられたるの人。其の最近事業とも見るべきは寄宿舍建設の資金として多額の金員を東京に寄贈せられたる事也。吾人は俄然オーバルトン卿逝去の凶報に接し深く其の死を痛むと同時に謹て哀悼の微意を表する者也。

女、
車屋サン、あたいネ、上野へお花見に行くんだから一生懸命に急いて下さい、
おアシは幾らでもダシてあげますから、ネ、



俥夫、
へえ、もう澤山てがすよ。わっちのからだはあゝ、もうおアセが一杯て、………………………………

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

附録

卒業生諸姉を餞す

エー、シー、マクドナルド

英語にては學校の卒業式のことを『コンメンスメント』即ち『事始め』と呼ぶ習はしなり。是れ何の故ぞや學生々活の終結を劃する如く見ゆるこの儀式を、しか名づくるは訝しとも訝しからずや。おのれ平素思ひて茲に至る毎に、多少の疑惑なき能はざりき。幾とせの螢雪の功空しからずして、いざ卒業といふ時に際しては、誰しも先づ第一に『我等は如何なる事を終へしや』と問ひ、次に『また如何なる事を始むべきや』と糺すなるべし。さなり、まづ我等は同窓の友どちとの共同生活を終へたり。素より我等は斯る時に際しては、學びの庭の友垣の睦びは、幾千代かけて變らじとこそ誓はめ、而して若干の親友とは、いつまでもその誓ひを完うするなるべし。されど足一たび校門を踏み出だせば、我等の路は四方に別れて、復相合ふことも稀ならん。げにありし昔の隔てなき仲の嬉しき語らひは、樂しき記憶となりて末の末まで腦裏に跡を留めん。されど顧れば無邪氣なる學校生活は既に終りて、歸らぬ過去のものとなれるなり。

且つ我等の敎師又は年長者より、助言を得、訓誨を受くる時代は、永へに過ぎ去りて、今よりは我等自ら能

人に助言を與へ、訓誨を加ふる地位に立たざるべからず。事茲に至らば、我等は時としては負擔の重きに堪へかねて、責任てふものゝなかりし昔戀しき思ひもすべし。又時としては疑惑不安の巷に彷徨ひて、そゞろにもとの恩師の力を借らまほしくなりもすべし。又我等のうちには、曾っては人の敎を受けし身の、今は其位置を變じて人を敎へざるべからざる地位に就く者もあらん。而して我等の多くは、思ふに從前の如く專念勉學に從事することを得ざるべし。然らば我等の修學期も亦終りを告げたるものと見て不可ならん。素より我等をして果して學に忠なる者ならしめば、生涯研究を棄てず、修養を怠らざるべし。されど今や、學校の敎室の四壁に圍まれし日に比すれば、修學の難易は決して同日を以て論ずべからず。

さなり、おもへば萬事卒業と共に終る如く見ゆ。我等が卒業證書を握る時、若しくは加奈太の大學に於てすなる如く、授與せらるゝ學位を受くるために大學總長の前に跪く時、我等の多くは萬感こもゞゝ胸に迫る心地に堪へず。而して我等が祝賀の詞を受くる刹那よ、げにその時は歡喜の感よりも寧ろ悲愁の情に打たると云ひて、決して不可なからん。卒業證書——我等の在學中の勤勉と、人生の眞理想に到達したる事とを表彰する意味に於てのみ價値を有する卒業證書は、此時に際しては、過去幾年間の胸の寶と愛でにしものを失ふ悲みを償ふに足らぬやう覺ゆるぞかし。

若し失ふ所かばかり多しとせば、之を償ふものは如何なるものにやあるべき、知らず、卒業と共に我等は何をか始めんとはする。いとしき我友よ、すべての價あるものは皆此時よりぞ始まるとは知り給はずや。諸姉は譬はゞ、かの美妙の一曲を奏でゝ聽衆に高潮の感興を與へんとて、弓を絃上に走らす前に、まづ樂器を整調する樂師の如し。されどこれ猶ほ最初の準備にあらず。是より先、木を削りて形を作り、塗りて色を施し、絃を附して響を與へて樂器は調製せられたり。又樂師は幾とせの光陰を研究に費して、漸く音樂の奥義を探ぐり、

さて茲に神秘の聲調を掻き鳴らさんとはすなり。

嗚呼是諸姉の生涯に於て、將に始らんとするものに非ずや。人生の行路を清美にするために人の聞くを要する音樂は、諸姉は史上の偉人に接觸せる間に之を學びたり。諸姉が漸く了解しそめたる諧音は只聖靈との接觸によりて、始めて之を完璧とすることを得べし。諸姉は既に此等のことを學びて、今や世上の人にたへなる神樂を聽かさんとて、かしまだちの首途に在るなり。諸姉は今より優しき愛の手を伸べて、行き艱める人を扶け起し、悲める人の涙を拂ひ、人々をして此世を住み甲斐のある所と思はしめ、併せておのが日常の行爲によりて品性の美を發揮し、世をして最高最美の人生の歸趣の那邊に在るかを知らしめざるべからず。

觀じ來れば、學生々活は、人生てふ一大學校に入る豫備門に過ぎず。この課程を經て我等は他の學校——更らに大なる學校に入るなり。一たび爰に來れば、校長に地位に在はす君は、我等の伴侶となり、奬勵者となり、此世ならぬ高尙なる言葉にて我等を呼び掛けたまふなり。

而して我等の多くが今や入學せんとせる此大學校に在りては、我等が豫備門の課程を果して忠實に修了したりしや否やを試驗する機會の、實に多く存ずることを記憶せざるべからず、諸姉は既に靈界の清美を一瞥したりしや。さらば諸姉の心靈をして、此境に住むにふさはしからしめよ。諸姉は既に明確に考慮する工夫を積みしや。さらばその訓練せる頭腦を、惑へる人、悲める人、淋しき人を助くる問題に適用せよ。すべて日常の生活には、機敏にして伶悧なれ。而して强固なれ、おのが身のためにあらで、弱き者を助けんがために。諸姉は既にキリストを知ることを學びしや。さらばおのが美德によりて、たへなる主の御姿を世の人の前に輝かせよ。諸姉若し頭を回ぐらさば、惱み哀しみ、悶え苦しむ者を見るに難からざるべし。かゝる者に、世の望みなる主のおとづれを傳へて、之を慰め、之を勵まし、之をして奮起せしむるは諸姉の務めに非ずして何ぞや。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

このごろ我友の一人は、おのれに其愛誦の聖書中の句を示しぬ。曰く『爾曹もし之を知りて、かくの如く行さば福なり』と。嗚呼これ眞生活を開始せんとする者に對して、最もふさはしき聖詞に非ずや。我等は既に在校中に諸種の課目を修め、今や樂しき過去の生活を離れて、更に樂しき未來の生活に入らんとす。我等若し既に學び得たる愛と眞理と美との大原則を、我等の日常生活に實現することを得ば、其幸福や、蓋し測るべからざるものあらん。

「葉櫻號」發刊に就て!!!

陽麗春四月今や和樂の風空に滿ちて野邊は千紫萬紅の色に薫ぜむとす。讀者の多くは樂しき家庭に於て或は自然審美の天地に於て疲れし心を休め新鋭活躍の氣を養ひ、新しき勇氣と信念とを以て再び學びの道に入り給ひしと信ず。あゝ多幸なるかな青年諸姉の前途。

諸姉の好代表たる雜誌「明治の女子」も此處に春光一沫の餘薫を受けて今や卯月號を刊行し更に又一倍の活氣と趣味とを以て五月號は生れむとする也、讀者諸姉の熱誠なる同情の一念に依り編輯子の机邊は今や玉稿積むで山を成さむとす。云ふ勿れ針小棒大の過言と。本誌は紙數の許さむ限り之を網羅し公表すべき義務あると同時に或る特別なる方法手段に訴ふるも寄稿者滿腔の熱誠を無にするを欲せざる也。吾人は今事實として紙數に制せられて。幾多寄稿者諸氏の本意に背きしこと多大なるを思ふて竊に冷汗慚愧の感なき能はず。

此に於てか吾人は來らむとする陽麗五月に於て紙數を増加し記事を撰み「葉櫻號」なる名月の下に盛裝美觀を盡して讀者諸子と相見えむとす。櫻花既に散つて躑躅笑ひ藤波薫じ花の都は綠陰青葉の新衣を着けて一倍の

美を現せすとする五月皐月の好時節、諸姉修養の資料としてはた亦綠陰淸爽の友として葉櫻號一卷を讀者諸姉の机邊に呈するも亦近きにあるべきを信ず。

特に五月發行「葉櫻號」の爲め

柏井園氏

は特得勇健の達筆を奮はるべく其の他尙ミス、マクドナルド氏の美しき論説を始め

新渡戶稻造氏

井深梶之助氏

津田梅子女史

などにも執筆依賴中也。想ふに次號の誌面は千紫萬紅論説に訪問欄に時ならぬ花紛の薫するをみるべし。乞ふ活目して次號の出づるを待たれよ!!

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA